

---

# 風の吹きぬけた先に.....

茅野 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の吹きぬけた先に……

### 【Nコード】

N2373G

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

青年と、野良猫（彼女）の、ほんの短い時間の物語。

## (前書き)

お時間潰しにとゆづぐ、しし覧をいたしました。

空が、何処までも青く澄んでいる。 風は冷たく、身体へぶつかり二手に別れ、身体を抜けたその先で、また一筋の空気の塊と成り、吹き抜けて行く。

コートの前を掻き合わせて、自分よりも大きな、人という動物が、すっかり葉の落ちてしまった街路樹の脇の歩道を、急ぎ足で過ぎて行く。

その様子を、古い雑居ビルの外、非常階段の陰に隠れてじっと動かないままで、彼女は見ていた。

同じ様に急ぎ足で通り過ぎていく人影は、決して多くは無いけれど、彼女はたった一人の青年がやってくるのを、今日も待っている。

彼は、何時も食べ物を持って来てくれる。 アパート住まいで、ペットを飼えないんだと、何時か言っていた。 そして彼女のことを褒めてくれた。

「お前は、野良なのに何時も綺麗にしているんだな。 お前の青い目を見ていると、気持ちが落ち着くよ。 こんなに器量良しなんだから、誰かが連れ帰ってくれても良さそうなんだけどな」

しゃがみ込んで、彼女の食事風景を、のんびりと観察しながら、そう言ってくれた。

青年は、彼女のことを「しろ」と呼んだ。 耳から四肢、少しだけ先端の曲がった長い鍵尻尾の先まで、彼女の身体は真っ白だった。 彼女は食事を終ると、青年のしゃがんだ膝先に、身体を摺り寄せ、鼻先をこすり付ける。

そうされると彼は、彼女の耳の間や首筋を、優しく撫でてくれた。

ある雪の日、彼は何時も通り彼女の元へ訪れた。彼女に傘を差しかけてくれた。

「こんな雪の降っている日まで、おれの事、待っててくれたのか」  
そう言って、彼は彼女を抱き上げた。

「ここじゃ、寒すぎるよ。……一緒に、行こうな？」彼は少しだけ躊躇って、それから彼女を、自分のコートの中に入れて、歩き出した。

せめて、この雪が消えるまで、何とかして自分の部屋の中へ、彼女を置いておく方法を、考えながら歩く。今日の雪は、中々、止みそうもない。朝までに、十センチは積雪するだろうと、天気予報では言っていた。

青年は、大人しく自分の懷に蹲っているしるを、誰にも見付けられないように抱え込み、片手でコートのポケットに入った部屋の鍵を探り、そつと自分の部屋の鍵を開け、少しだけ周りを気にしてから、急いで玄関扉の中へと、滑り込むようにして入った。

部屋に入ると、青年は初めに、懷の中に居る彼女の身体を乾いたタオルで拭いてくれた。エアコンのスイッチを入れ、彼女を拭き終わってから漸く、自分のコートを脱いで、ハンガーへ掛ける。冷蔵庫から冷たいミルクを出して、鍋に移して、本の少しだけ暖めた。

平たい小振りの皿へ温めたミルクを半分注ぎ、残りの半分は自分のマグカップへと注ぐ。

彼女は少しはなれたところで、小首を傾げている。

「飲んで良いんだよ？ ほら」

そう言って、彼女の鼻先へ、ミルクの入った皿を置いた。

おずおずと、彼女がミルクに口をつけるのを嬉しげに眺め、あ、と小さな声を上げる。

「キャットフード、他の皿に入れてやるよ」

立ち上がり、食器棚代わりに使用しているカラーボックスの中から、別の皿を取り出して、何時ものキャットフードを、ザラザラと音を立てて、もう一つの皿へ入れてくれた。

彼女は、少し落ち着かない。部屋の中はエアコンのお陰で随分と暖かくなってきたけれど、自分をこの暖かい場所へ連れてきてくれた青年は、扉を隔てた先へ姿を隠してしまい、さつきから、水音がしている。

「ちよつと、風呂へ入ってくるから、大人しくしているよ？」  
そんな言葉を残して、行ってしまったのだ。

彼女はキョロキョロと、部屋の中を見回してから、色々な場所を確認して周った。　どうやら中に青年が居るらしい扉を見つけて、小さくカリカリと、爪を立てて音を出す。

「しろ？」　と言う声がして、扉が少しだけ開いた。　中から白い湯気が漏れ出してくる。

「お前も入りたいのか？　……そんな訳、無いよな。　猫は水に濡れるの、嫌いな筈だから」

少し可笑しげにそう言っ、湯船の中から、彼女の様子を観察している。

彼女は風呂場のタイルに、そつと前足を下ろした。　水に濡れるのは、やはり好きではない。　一步踏み出して、直ぐにタイルから足を浮かせて、プルプルプルと足についた水を払い落とす。　もう一步、同じ動作をして、少しずつ、風呂場の中へ進んで行く。

青年は面白そうな顔をして、しろに手を伸ばす。　素直にその手

に捕まって、彼女はバタバタと、もがいて、後ろ足がお湯に浸かって慌てて足を縮めた。

青年は笑いながら、彼女を洗い場へ降ろしてあげた。

風呂から上がり、部屋へ戻った青年は、部屋の隅々までウロウロしているしろの姿を見た。

カリカリ、と微かな音を立てて、部屋の隅や、家具の影や、何かを探している様子だ。その落ち着かない行動を見て、青年は気付いた。

「トイレ、かな？」　そう言いながら、ベランダへの戸を開けて見た。

狭いベランダには、以前、この部屋を借りていたらしい人物の、ガーデニングの跡がほったらかしにしていた。冷たいベランダへ、そつと足を踏み出した彼女は、今は土しか入っていない、プランターを見つけた。

邪魔だと思っていながら、面倒臭くてそのままにしてあったプランターだ。こんな事で役に立つとは、青年も思いもよらなかった。

彼女はチラリと青年を振り向いてから、そつとプランターの端に前足を掛けた。

プランターの中に土を見つけたしろは、何と無く周りを気にしている様子を見せる。

「そうか、俺が居たら、トイレ出来ないのかな？」　そう呟いて、青年は、彼女の出入りできそうな分だけ戸をあけて、彼女に声を掛ける。

「終わったら、部屋の中に、入って来いよ」

そう言って、自分は部屋の中へと戻って行った。

その夜、青年はしろが足元で丸くなって眠っているベッドへ入り、安らかな気分で就寝した。

翌朝、青年はどうしようかと考える。一人暮らしのアパートで、しかもペット禁止のこの部屋で、昨夜つれてきた彼女を置き去りにして、ベランダの戸だけを少し開けておくべきなのか？ それとも、今日も懷へ彼女を入れて、何時も自分を待っていた、あの雑居ビルの非常階段下へ連れて行っておこうか……？

そうするのなら、帰りにまた彼女を連れてくれば良い。けれど、それでは雪の積もった外の冷たい空気の中、しろは夕方まで待たなければならぬ。

青年は、実家から送られてきた荷物が入っていた、確りとしたダンボール箱を見つける。このまま、ベランダの窓を開けていくのも不安がある。それなら、近くにこのダンボールで、雪と風を避けられる場所を作ってあげようかと考えた。

けれど、一瞬で考えが変わる。下手な所へしろの入った段ボール箱を置いてしまったら、捨て猫、と判断されるかも知れない……、それでどうなる？

それでもこのまま部屋へ置き去りにしていくのも問題がある。

結局、青年は、しろを昨日のように、コートの懷へ隠す様にして、何時もの場所へと連れて行った。

「夕方、また来るからな？ 待っているよ」

そう、小さく声を掛けて、人通りのそれほど多くない街路樹脇の歩道に面した、何時もの、雑居ビルの非常階段下へと彼女を降ろし

た。段ボール箱は潰して、持って来ていた。彼女の佇むその下へ、敷いて置こうと考えた。それなら、積雪の上に直接居るよりも、余程、暖かいだろう。

風がまた、冷たい空気を運んでくる。今は二月。その内、直ぐに暖かくなつてくれるだろう。青年は、一日も早く、春の気配を見つけ出したい気分になった。

夕方、青年は何時も通り彼女が居る筈の、雑居ビルの非常階段下へと急いで向かった。

けれど、朝、確かに潰した段ボール箱の上へと、彼女を降ろした筈なのに、彼女の姿はそこには無かった。

あの日から、一カ月半の時を数える。春一番は、とうに吹き抜けて行つた。今年の春一番は、二月の終わりに、吹き過ぎた。

青年は、彼女のことを心配しながら、時に「しろ！」と、声に出して呼びかけながら、あの日から数週間を過ごしていた。

それでも、彼女を見つける事は出来ずに、随分と暖かくなつてきた日差しに、目を細める。

そして、あの場所で。彼は久し振りに彼女の姿を見つける事が出来た。

彼女の後を、子猫が二匹、追いかけるようにしてついて行く。一匹、一番小さな子猫の首根っこを銜えて、合計四匹の猫の親子。彼女に銜えられている一匹は、彼女の尻尾と同じ、先っぽだけが鍵尻尾になっている。他の二匹は薄い灰色のトラ猫だ。けれど

その内の一匹は、やはり彼女の尻尾と同じ鍵尻尾。

彼女は注意深く辺りを見回してから、人通りと共に、車の通りも少ない道を、急ぎ足でわたって行った。

道の向こうには、小さな公園があった。猫の親子の引越しかも知れない。

春風が吹き、過ぎ去って行く。 暖かい空気に触れた青年の頬には、微かな笑みが浮かんでいた。

( E N D )

（後書き）

ご一読、ありがとうございます。  
してくだされば、幸いです。

もし宜しかったら、感想など残

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2373g/>

---

風の吹きぬけた先に.....

2010年10月9日00時27分発行